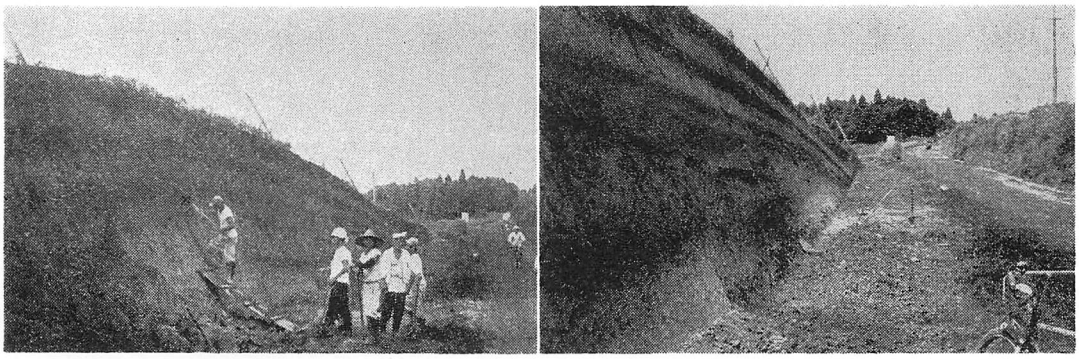
Ⅲ 宮崎県の円筒土器

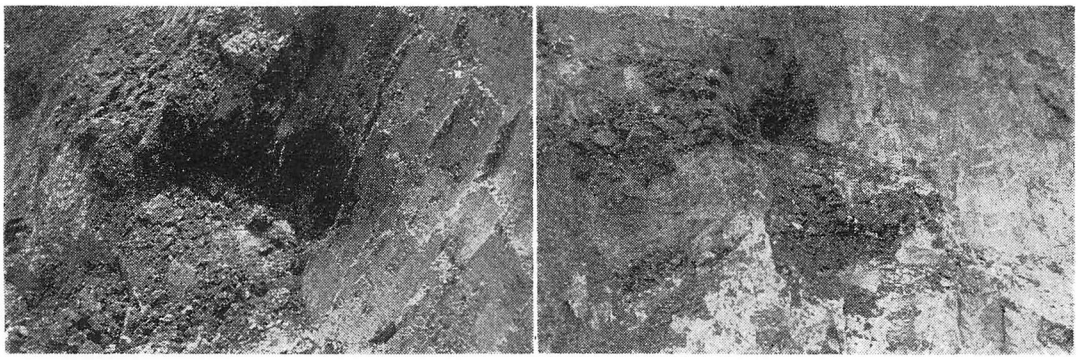
野　間　重　孝



第１図　　五十市式土器発見地点と地層　（昭和37年６月賀川撮影）

(1)　発見地の地形と地質

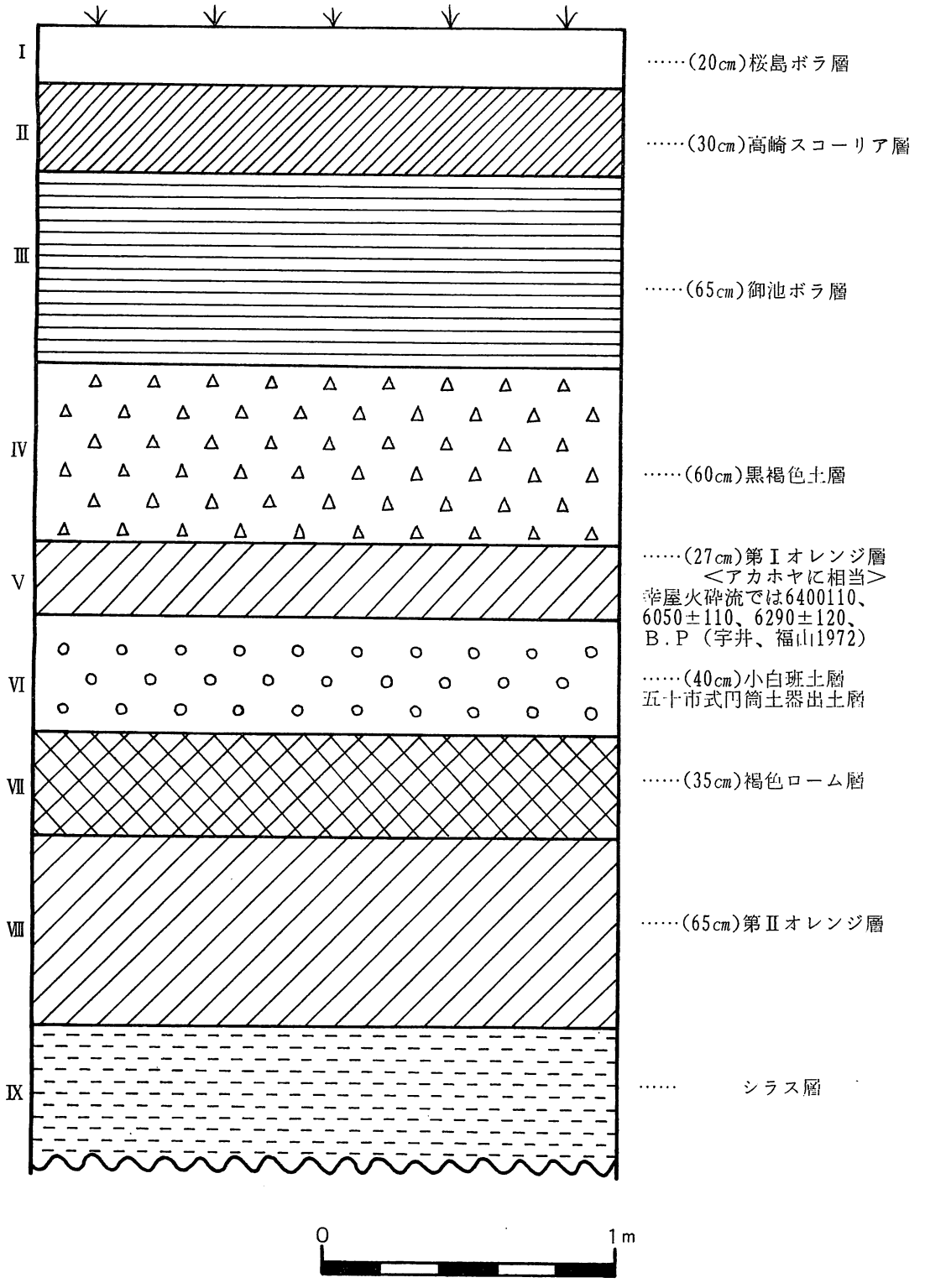
宮崎県の円筒土器五十市式土器の出土地は、宮崎県都城市今町9072番地に属し、都城市街地に近い南部の位置にある。



第２図　　五十市式土器出土地点　（昭和37年賀川撮影）

五十市式土器は昭和37年６月、県道都城―志布志線の道路拡張工事の際に発見され、この県道は現在国道269号線となり志布志線の要道をなしている。遺跡は国道269号線が国道10号線から分岐する大岩田から1000mほど南下した位置にあり国鉄志布志線が東側に平行して走っている。発見当時の遺跡周辺は高台の畑地であったが昭和45年に国道より西側部分が土採り造成されて、ドライブイン「和光」が建設され遺跡の主要部は消滅してしまった。現在は東側のみが残されている状況にある。

遺跡周辺の地形は標高140～150m程度の都城市街地より一段高くなった標高160 m程度の台地になっている。遺跡の西側は国道269 号線より70m程いったところで急に下がり国道10号線との間に都城盆地の底地が入り込みその中央部を大淀川の上流が北流している。また東側は今町台地が広がり一段下がった位置に梅北川が北流しており、この梅北川は木前で大淀川に合流している。



今町台地土層図（S＝1/20）

したがってこの今町台地は大淀川と梅北川に挟まれ大岩田を根かんとする台地を形成している。中でも遺跡の立地する位置はこの台地の中でも一段小高かくなっている。

今町台地は第四紀古層の洪積台地で霧島火山帯の噴出物によって「シラス」「ボラ」「赤ホヤ」という特殊土壌により形成されている。

(2) 層　位

都城地方の地層は、霧島火山帯の影響を受けて復雑な形成をしている。

五十市式土器の出土した層位については、当時発見者である都城市文化財調査員の児玉三郎氏に現地を案内してもらい現在残されている国道269線の東側壁の状況の観察と 都城市史及び 昭和50年4月刊、都城市の文化財（都城市教育会編）を参考して出土層の確認を行った。またこうした出土地点の把握のもとに層位の形成及び名称については、宮崎大学の遠藤尚教授に指導を受けた。

遺跡の立地する今町台地は、南九州特有のシラス層の上部に8層の層位を確認することができたそれらについてみると第1層が桜島ボラ層が存在する。この桜島ボラ層はところによって厚いところと薄いところがあるようである。第Ⅱに高崎スコーリア層が存在しこれは暗黒色で小粒子を含むものでザラザラした感じの土質をしている。

第3図　五十市式土器の取り上げ
（1962年6月都城市提供）

表土が耕作土層になっているため前述した第Ⅰ層と第Ⅱ層の土層が攪乱されており明確に層位を区別することができない状況にある。第Ⅲ層は黄色土層であり、これは御池ボラ層と呼ばれるものである。第Ⅳ層が黒褐色土層、第Ⅴ層に再び黄色土層がはいり、これは第Ⅰオレンジ層（アカホヤに対比）と呼ばれるものである。第Ⅵ層は小白斑を混入するもので小白斑土層と呼ばれるものである。第Ⅶ層に褐色土層がはいりこれは褐色ロームと呼ばれ、第Ⅷ層に黄色土層がはいりこれが第2オレンジ層である。第Ⅸ層に南九州特有のシラス層があり、このシラス層はかなり厚い層を形成している。こうした層序のなかで五十市式土器は第Ⅵ層の下部で第Ⅶ層との接点から出土しているようである。

以上の層位について遺物の包含状況をみるとき、小林市の「こまくりげ[注]遺跡」が参考になる。地理的には、都城市と小林市とは霧島山系を中心に南北に位置しているが、地層の形成については霧島火山帯の影響を両地方とも受け類似性がみられる。

「こまくりげの遺跡」の出土遺物を層位的にみると第Ⅱ層の漆黒色土層（高崎スコーリア層）下部から土師器片、須恵器が出土しており、第Ⅲ層の黄褐色土層（御池ボラ層）は無遺物層で第Ⅳ層の黒褐色土層からは、縄文晩期の黒色磨研土器、後期の市木式土器、市木式系土器また下部からは岩崎上層式土器が出土している。したがって、この層は縄文後晩期に相当することがいえよう。第Ⅴ層に赤褐色土層（第1オレンジ層）がはいるが、「こまくりげ遺跡」においては淡黄褐色粘質土層

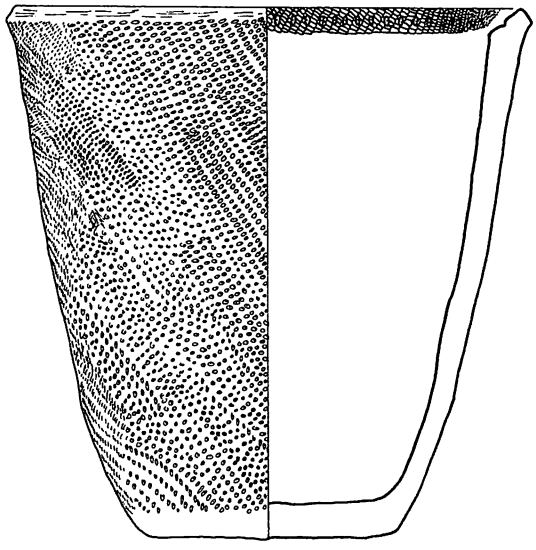
の間層がはいる。第Ⅳ層黒褐色土層から市木式土器、岩崎上層式土器が出土していることからその下層にくるⅥ層の小白斑を含む層は縄文時代の早い時期に相当することがいえよう。また下層にくるシラス層の下部は約2万年前と推定されている。

(3) 遺　物

土器は、口縁部径24.5㎝、器高25.5㎝、底部径13㎝、厚さ1.3〜1.5㎝程度の厚手で口縁部がやや外反する感じがし、胴部にあたっては少し張り気味で底部は平底に整形された円筒土器である。

口縁部内側にはヘナタリと思われる貝殻によって刺突文が一列めぐらしてあり、それを中心に幅2㎝で左下り斜行の縄文が施されている。器壁表面は、角度40度右下り斜行の縄文が全面に施されている。縄文を施文にあたっては上部から下部まで一気に施文しているようである。土器内部は口唇部の施文があるのみで器壁裏面は指頭によって調整されており、その状況を良く観察することができる。口唇先端部は縄文施文後ヘラ状のもので研磨されている。胎土に小量の長石を含んでおり焼成は良好である。

また器壁を観察すると胴部より上部は黒く煤けており下部は赤褐色を呈していることからこの土器製作については伏せた状態で焼かれたものと思える。



第5図　五十市式土器実測図

以上五十市式土器について述べてきたが、この土器は昭和37年に道路拡張工事の際に単独に出土しており、また当時調査なるものが成されておらず共伴した遺物についても判然としない。したがって五十市式土器を考えるとき、施文からみて東からの影響、つまり瀬戸内一帯の縄文早期末前期の縄文施文の技術と対比しなければならぬと考える。ともかく南九州で唯一の縄文を全面に施文する円筒土器の出現には注目すべきであるが、大分県川原田洞穴発見の類似土器も再考しなければなるまい。川原田出土のもので文様帯に刺突文を一列めぐらし、表面は全面に縄文を施しているものがある。形態的には跡江式、塞ノ神式土器などが胴部を誇張するのに対して、それほど胴部の誇張がみられない。また口縁部が外反するの対して、それほど外反しない。このことは純粋に円筒形土器としてとらえるべきであろう。五十市式土器については、他縄文式土器との形態的、共伴関係については今後の新資料にまちたいと思うが出土層については明確なため層位的にみても第Ⅵ層の小白斑土層は縄文時代前期前半に比定して良いもの思われる。

(4) 東九州の円筒土器

五十市遺跡発見の円筒土器は、器面全体に斜縄文を施し、第1オレンヂ層〈アカホヤ〉下部層において発見されたことで、層位的には貝殻文を主体とする南九州の円筒土器と同時代と判断できる。この器面全体に縄文を施す技法は、最近東九州の各地で若干出土例をみるが、その器形を復原してそれが円筒形の土器と判断するだけの資料とはなっていない。それらのうちで、大分県速見郡山香町川原田洞川層出土の土器は、口縁部裏面に刺突文をもち2段撚（ＬＲ）の縄文を器面全体に斜行させる。五十市出土の円筒土器に近似の資料といえば川原田洞穴の縄文施文の土器である。今後前期土器のうち円筒形の形態に終始し、縄文施文をもって器面を飾る種類は注目しなければならぬ。

さて、南九州の貝殻文を施文した円筒土器のうち、宮崎市跡江遺跡の円筒形土器（吉田式）は、出水式（早期押捺文）と共伴をなして注目される。この他、宮崎市無田上、都城市横市遺跡出土の円筒土器（吉田式）などとともに、宮崎平野に集中して発見されている。このうち五十市に近い横市遺跡の土器は、層位的に確認されているとはいえないが、五十市の縄文施文の円筒土器を考えるうえで重要である。東九州の貝殻施文の円筒土器は、宮崎市周辺以南に、縄文施文の円筒土器は四国、瀬戸内一帯の東からの影響とみることができる。五十市発見の土器をめぐって、今後の研究が注目される。

参 考 文 献

(1) 1965 賀川光夫 縄文文化の発展と地域性 九州東南部 河出書房刊 日本の考古学Ⅱ
(2) 1966 江坂輝弥 縄文土器 九州編(3) 考古学ジャーナル12月号 ニューサイエンス社
(3) 1972 こまくりげ遺跡 九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告 宮崎県教育委員会